イエスの生涯と思想

――イスラエルにおける「精神革命」Ⅱ――

伊東 俊太郎

目　次

Ⅰ　イエスの生きた時代と社会
Ⅱ　イエスの生涯
（i）イエスの誕生
（ii）洗礼者ヨハネとの出会い
（iii）イエスの宣教
（iv）十字架の死
Ⅲ　イエスの思想
（i）終末の思想
（ii）律法観
（iii）「地の民」へのまなざしと神殿批判
（iv）愛（アガペー）
注
文献表
（付）イエスとブッダの比較

Ⅰ　イエスの生きた時代と社会

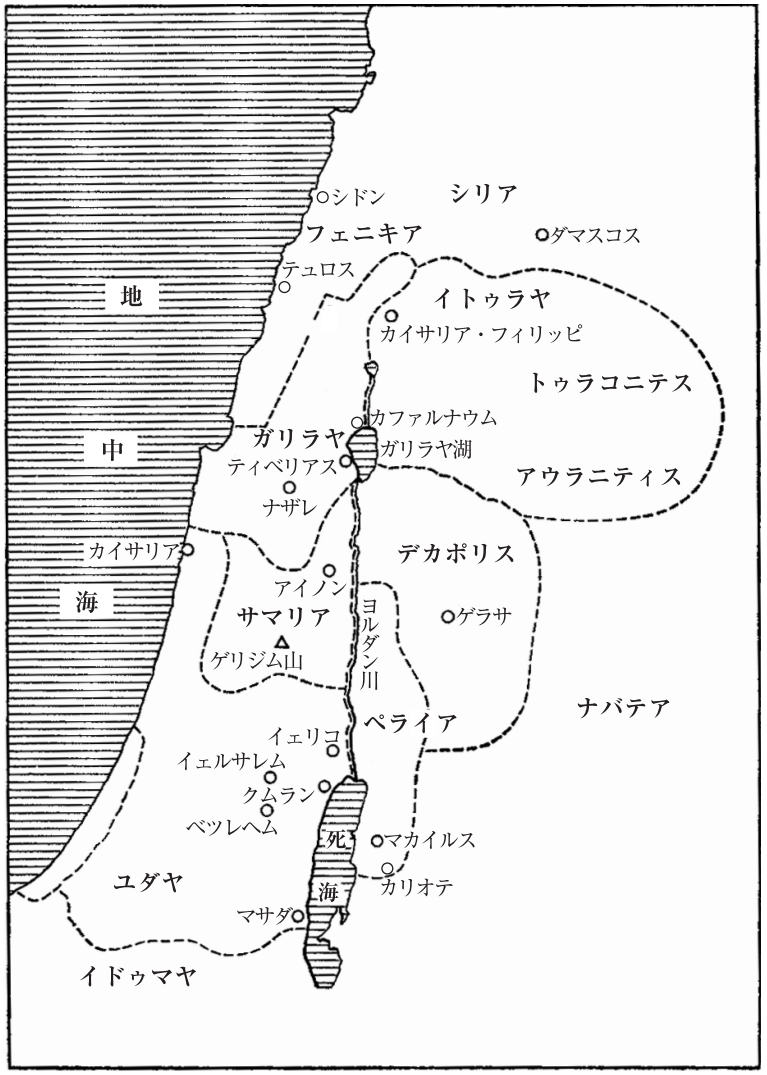
イエスの生きた時代は、「イスラエル地方」（パレスティナ）がローマの支配下に入った時代であった。パレスティナにローマの支配権が直接及ぶようになったのは、前六三年のポンペイウス（Pompeius 前一〇六―前四八）のパレスティナ征服にはじまる。当時ポンペイウスは、かの「シーザー」つまりカエサル（Caesar 前一〇〇頃―前四四）およびクラッスス（Crassus 前一一五頃―前五三）と第一回三頭政治を実現していたが、この時代はローマが東西へとその領土を最も拡大した時であった。すなわち西はカエサルによりガリア諸地方に、東はポンペイウスとクラッススにより、小アジア、シリア、パレスティナ、そしてパルティア方面にである。それまでのパレスティナ

におけるハスモン朝ユダヤ国家は、シリアとエジプトの二大ヘレニズム勢力――セレウコス朝とプトレマイオス朝のはざまにあって常におびやかされていたが、なんとか独立を保っていた。しかし前一世紀にこの両王朝がローマによって滅ぼされる（前六四年と前三〇年）と、このユダヤ国家も前六三年にはローマ属州に編入されてしまう。

この混乱期に台頭してきたのが、後に「大王」と称されるに至ったヘロデス（Hērōdēs 前七三―前四）である。彼はユダヤ出身ではなく、ハスモン朝下でユダヤ教に改宗せしめられた南部のイドゥマヤ出身であるにもかかわらず、ハスモン朝の末期の紛争に入りこんで権力を伸ばしていった。彼は父と一緒に、つねに変ってゆくローマの新しい支配者たちに歩調を合わせ、彼らに次々とり入って自己の勢力を安定させた。ヘロデスがハスモン朝に代ってユダヤ国王（Rex Judaicorum）の地位を確立したのは前三七年であるが、これも、ときのローマの権力者アントニウス（Antonius 前八二―前三〇）の、その後はオクタウィアヌス（Octavianus 前六三―後一四）の承認と支援をうけてのことであった。それゆえヘロデスの「ユダヤ王国」はローマの傀儡政権といってよいが、しかしこの王国のもとで屢々重要な文化的事業もなしとげられた。たとえばパレスティナ最高の港湾都市カイサリア（カエサル・アウグストゥスの名にちなむ）をはじめとして多くのヘレニズム都市を建設し、死海西岸の要塞マサダなどに自己の宮殿をつくったが、なかでも最大の事業はイェルサレム神殿の造営であろう。この神殿は初め前一〇〇〇年ごろソロモン王のときに造られた。それが前六世紀のバビロニアの侵略によって破壊されたあと、いわゆる捕囚後のペルシア時代に第二神殿がつくられた。それを改造したのがヘロデスであるから、言わば第三神殿と言ってよいものであるが、それはローマの建築技術をとり入れた壮大なものであった。その壮大さにイエスの弟子たちが驚嘆し、イエス自身が最後に問題を起し、捕えられて死に追いやられるのは、ここにおいてである。

他方、ヘロデスは密告組織などにより民衆を弾圧するところもあったが、とくにハスモン家と結びつくために、この家系の血をひく女性と結婚しながら、讒言によってハスモン家の再興を懼れ、彼女とその母のみならず、彼女との間にできた二人の子息すら反逆のかどで殺してしまった。「マタイ」伝において、彼がベツレヘムでイエスが誕生したとき、その地の二歳以下の男の幼児をみな殺させたというような話がつくり上げられているのも、猜疑心によるこの残虐な面が誇張されたためであろう。

紀元前四年にヘロデスが七〇歳で病死すると、ユダヤ王国は彼の別の夫人の子供たちに分割された。すなわちアルケラオス（Archelaos 在位前四年―後六年）には、「エトナルケース」



地図：イエスの時代のパレスティナ

（Ethnarchēs 民族統治者）の称号とともにユダヤとイドゥマヤとサマリアの地を与えられ、ヘロデス・アンティパス（Hērōdēs Antipas 在位前四年―後三九年）とフィリッポス（Philippos 在位前四年―後三四年）には、「テトラアルケース」（Tetrarchēs 四分統治者）として、ガリラヤ、ペライアの両地域と北トランスヨルダンの地方（ガウラニティス、バタナヤ、トゥラコニティス、アウラニティス、イトゥラヤ）が、それぞれうけつがれた。

このうち、アルケラオスは内政の失敗のため住民に訴えられ、皇帝アウグストゥス（Augustus）となったオクタウィアヌスの手によって、後六年にガリアに追放されてしまう。この後のユダヤ、イドゥマヤ、サマリアの地域は、ローマの直轄領とされ、ローマ帝国から派遣された「プラエフェクトゥス」（praefectus 地方総督）により、政治的軍事的に治められることになる。ここにイエスを処刑したポンティウス・ピラトゥス（Pontius Pilatus）が登場してくるのである。彼は五代目のこの地方総督（在職、後二六―三六年）であった。

次にヘロデス・アンティパスであるが、彼はイエスが生れ育ち活躍したガリラヤ（この地方の特質については後にやや詳しく述べる）を支配したので、イエスとの関係は深い。またイエスの先駆者ヨハネを殺したことでも重要な関わりをもつ。また後のイェルサレムにおけるイエスの審問にも関与している。彼はガリラヤ湖西岸にこの地方の首都としてティベリアスを建設し、またヘレニズム都市セフォリス等を再建し、この地方のヘレニズム化を推進したが、このために徴税の苛斂誅求も行って、ガリラヤの住民を悩ませた。

第三のフィリッポスも北方にカイサリア・フィリッピをつくり、ガリラヤ湖北岸のベトサイダにアウグストゥスの娘ユリアの名にちなんでユリアスという都市も設けた。しかし全体として彼の治世は温厚なもののようであった。

さて次に当時のイスラエルにおけるユダヤ教の状況に一瞥しておかねばならない。当時のイスラエルでは、ハスモン王朝内の内紛とからんで、紀元二世紀後半以降、さまざまな流派が分立・拮抗していた。そのうちイエスとの関係で述べておかねばならないのは、ファリサイ派（Pharisaioi）とサドカイ派（Saddūkaioi）とエッセネ派（Essēnoi）である。

ファリサイ派は、神の恵みへの応答として「律法」（「トーラー」だけではなく、その後の口伝律法も含めて）の厳守を心がけ、それを守らない人々を「罪人」として差別し貶めるユダヤ教集団で、ユダヤ人社会の律法学者や商工業者などの中間層の多くがこれに属する。

これに対し、サドカイ派はユダヤ神殿体制の担い手で、貴族祭司、大土地所有者などの富裕層から成っており、彼らはモー

セの五書だけを正典とし、復活や天使を否認していた。

ユダヤの神殿体制は、ローマの承認を得たヘロデス家の実質的影響下にありながらも、宗教的には独立した自治機能をもっていた。その中心をなすのは最高法院（Sanhedrin）で、それは「大司祭」（archiereus）の下、七〇名の議員から構成されていた。その構成員は「祭司長たち」（archiereis）、「長老たち」（presbyteroi）、「律法学者たち」（grammateis）であった。

神殿は、成人したすべてのユダヤ人男性から年二ドラクマの神殿税をとり、その他すべての生産物・消費物に「一〇分の一」税を課した。また彼らは民衆のために「過越祭」を含めてさまざまの祭儀を行う代りに、多くの寄付や布施も求めた。つまりユダヤ神殿体制は、宗教体制であると同時に、巨大な利潤を収奪する経済体制でもあった。

最後のエッセネ派は、このような神殿体制から抜け出した元祭司階層から成り、終末思想をもち、救世主の出現を信じ、洞穴のなかなどに隠遁して私有財産も否定した、独身の禁欲的共同生活を営む集団で、一九四七年以降死海北西岸の洞窟群で発見された所謂クムラン（Qumran）集団の遺跡と文書は、このエッセネ派のものとされている。洗礼者ヨハネはこのエッセネ派から出たものと思われる。しかし彼は洞窟などにはこもらず、荒野に出て人々に終末のときに備えることを呼びかけた。

最後に、イエスが生れ育ったナザレ（Nazareth）という町があるガリラヤ（Galilaia）という地域――イエスの活動はほとんどこの地で行われた――について、その特質を述べておかねばならない。

ガリラヤはイスラエルのユダヤ、サマリアの両地域のさらに北に位置する、ガリラヤ湖の西に、東西約四〇キロ、南北五〇キロほどに拡がった地域を指す（八五ページの地図参照）。この地方は統一王国（ヘブライ王国）の分裂（前九三二年）の後は、北のイスラエル王国に属していたが、前七二二―二一年にこの王国が滅亡し果てると、支配したアッシリアの力で多くの異邦人がこの地に送り込まれ、ガリラヤの住民は純粋なユダヤ人の伝統から切り離され、「異邦人たちの地域」（Gālīl ha gōīm）と呼ばれるほどになる――これが「ガリラヤ」という地方名の起源になっている。[1]

しかし前一〇四年に、ハスモン王朝の五代目の王アリストブロス一世（Aristobūlos I　在位前一〇四―一〇三年）がガリラヤ北方まで遠征し、この地を強制的に再ユダヤ化して以来、この王朝下のユダヤ教がまた力を得るようになった。それでも一般の民衆レベルではこのユダヤ教に必ずしも同化しなかったので、イェルサレムを中心とするユダヤ人からは、非同調的な地方の田舎者として、つまりユダヤ教の戒律を受け入れきれない「地の民」（アム・ハーアーレツ 'am hā 'areṣ）として見下されていた。

もうひとつガリラヤ地方の特徴を挙げておかねばならないとすれば、そこにおける農業の豊かさである。とくにガリラヤ湖北西部のゲンネーサレ（Gennēsaret）平野の肥沃さは世にきこえていた。しかし問題なのは、その豊かさが民衆一般に還元されず、富裕層の土地支配により収奪されていたことである。イエス当時のガリラヤの支配者ヘロデス・アンティパスは、この土地の人々にさまざまな税金を課すと同時に自らはガリラヤ湖畔に大農地を所有していた。そしてイェルサレムなどの大都市に住む上層部の土地の投機買いも横行し、独自の自営民はますます疲弊していった。ガリラヤの豊かさをきいて、周囲から流入してくる働き手も多くなり、人口も膨れ上がった。当然社会の緊張は高まり、不安定となり、多く病（精神病を含む）が人々をおそった。

このようにしてイエスの生きた時代前後のガリラヤ民衆は、イェルサレムを中心とするユダヤ教の僻地として、経済的・政治的に圧迫され、宗教的にも差別されていたのである。[2]

話が少し逸れるが、筆者は一九七八年の春、イェルサレムと、ガリラヤのナザレおよびガリラヤ湖周辺を旅して回ったが、この二つの地方の土地柄、風土の著しく対照的なのに強く印象づけられた。イェルサレムのほこりっぽく乾いた、宗教漬けの匂いの強いハイブローな雰囲気と、ガリラヤの風までも優しい、のんびりした田園的風光の大きな違いに驚いた。

イエスを問題とする場合、ガリラヤとイェルサレムを常に比較してみることが重要である。[3] イエスの生涯を追う場合も、つねにこのガリラヤ的背景を念頭におかねばならない。

Ⅱ　イエスの生涯

イエスの生涯について語ろうとするとき、史料となるものは第一次的には四福音書、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの各伝しかない。[4] このうち「ヨハネ福音書」は、その作者の特殊な神学――神とロゴスの同一化とロゴズの受肉ということでイエスを捉える――に基づくもので、あくまでもイエスの生涯をありのままに出来るだけ客観的に、特定の神学的背景から離れて、人間としてのイエスの生涯を語ろうとするとき――この態度は、筆者によるソクラテス、孔子、ゴーダマ・ブッダの記述のときにも同じように変わらずとられた――本稿でも他三福音書より別あつかいとしなければならない。従って、残りの三福音書、いわゆる「共観福音書」（Synoptic Gospels）が基本となる。そのうち最古のものは「マルコ福音書」で、紀元五〇―七〇年にかけて成立したと考えられている。他の二福音書は、このいわゆる「マルコ伝」（と記すことにした）よりも遅く後八〇―九〇年頃に成立したとされ、ともに「マルコ伝」を下じきにし、それと当時存在していたと思われるイエスの言葉を集め

た「語録集」（Q資料とよばれる――Qはドイツ語のQuelle、「本源」「出所」を意味する）に基づいて編まれたものであるが、その編集方向（意図）は異にしている。

そこでイエスの生涯を能うかぎり忠実に追おうとする本稿では、まず「マルコ伝」を主とし、他の「マタイ伝」や「ルカ伝」はこれを補う（とくにイエスの発言をとり上げるとき）ものとして使用する。

その他フラウィウス・ヨセフス（Josephus Flavius 後三五―一〇〇頃）の『ユダヤ古代誌』『ユダヤ戦記』、その他ローマの史書、さらにユダヤ教側の「イエスについての記述」などを参照する。このうち最後のものは、これまであまり用いられてこなかったように思われる。

（i）イエスの誕生

イエスの誕生については、「マルコ伝」は何も記していない。「マルコ伝」は洗礼者ヨハネとの出会いから始まる。

イエスの誕生について、仰々しい粉飾的記事をつけ加えているのは「マタイ伝」である。これは人間イエスを神化するためであった。それによれば周知のごとく、ますアブラハムからダビデを経て、イエスまで四二代の系図が語られる（「マタイ」I、1―17）[5]。ついでイエスの母マリアはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならないうちに身ごもったので、ヨセフは「正しい」（δικαιος）人で、このことを公けにすることを望まず、ひそかに彼女との縁を切ろうと意を定めた。すると見よ、主（しゅ）の天使が彼の夢に現われて言った。「ダビデの子孫ヨセフよ、心配せずにマリアを汝の妻として迎え入れなさい。なぜならマリアは精霊（πνευμα αγιον）によって子を宿したのであるから。マリアは男の子を生むだろう。その子の名をイエスと呼びなさい[6]。この子は自分の民をその罪から救うであろうから。」（「マタイ」I、20―21）、ヨセフは夢から醒めて、マリアを妻に迎えた。

これについでイエス誕生の際に、星に導かれた東方の学者たち（μαγοι）のベツレヘム訪問が物語られているが、この「ユダヤ人の王」（ο βασιλευς των Ιουδαιων）の出現を祝うという彼らの言葉をきいて、ときのユダヤ王ヘロデスは恐れおののき、ベツレヘムとその近辺の二歳以上の男の子をすべて無にしたという話がつくられている。

また「ルカ伝」では、そのころ初代ローマ皇帝アウグストゥスから全国の住民に登録するように勅令が出され、当時のシリア州の総督であったキリニウス（Quirinius, Κυρήνιος 後六―一一在位）の最初の住民登録が行われた。このとき人々は自分の本籍地にもどって登録するために、ヨセフは自らの出身地であるダビデの町ベツレヘムに向って、住んでいたガリラヤの町ナザレを離れて旅立った。このベツレヘムでマリアは月満ちて

子イエスを生んだ。しかしそこには宿るところがなかったので、布にくるんで「飼葉桶」のなかに寝かせたとある（「ルカ」Ⅱ、1―7）。ここでは東方の学者たちではなく、その近くの野にいた羊飼いたちが、天使のおつげでイエスの誕生を祝ったことになっている。

このイエスの誕生したのは何時であるかは、はっきりしない。「マタイ伝」、「ルカ伝」によれば、それはヘロデス大王（Herod the Great, Ἡρῴδης ὁ βασιλεύς ユダヤの王として在位前三七―前四）の時代、しかもその末期であると推定される。そうすると紀元前四年か、その少し前の年ということになるが、それを確定することは所詮できない。ここでは多くの人がとっている前四年ということにしておこう。

誕生地についても、ベツレヘムというのはダビデ王の誕生地と結びつけるために捏り出されたもので、実際のところイエスは前四年ごろガリラヤのナザレの町に生れ、そしてそこで育ったとしてよい。

さらにその「処女降誕」ということはあり得ないから、実際のイエスの誕生については考え直さなければならない。これについては、すでに古くからある伝承が知られている。すなわち三世紀のキリスト教神学者オリゲネス（Origin, Origenes, Ωριγένης 一八五頃―二四五頃）が、その著『ケルソス駁論』において、異教の哲学者ケルスス（Celsus）がユダヤ人から聴いた話として、次のようなことを紹介している。

「イエスはユダヤの村の貧しい女から生れた。その女は姦通のために、大工である夫から追い出され、放浪先でイエスを生んだのだった。イエスは貧乏をのがれるためにエジプトに行って労働した。そこで魔術をおぼえ、帰国後これを利用して自分は神であると言い張ったのである。彼の母はパンテラ（Panthera）というローマの兵士により身ごもらされたのだった。[7]」

また実際、ユダヤ教側の資料としてのイエス伝「イェシューアの伝記」（Tōlᵉdōt Yesūʿa）には、イエスの誕生と死についてさまざまな伝承があるが、そこには「イエスは私生児（マムゼール）であり、自らを弁護できない」とユダヤ人は主張したと述べられている。

このイエスがヘブライ語でいう「マムゼール」（mamᵉzēr, bastard）、つまり両親が法的に正当な結婚関係にあったか分らない、それゆえまた両親が完全にユダヤ人であるか確認できないものであることは、ユダヤ教の側ではもうかなり周知のことであったようだ。つまりイエスはユダヤという社会において、はじめから、「父知らずの子」として見下されていた存在であったと言ってよい。彼は終生、社会から疎外されてきた人々、娼婦、徴税人、重い皮膚病（ハンセン病？）を患っている人々に付き添い、彼らの側に立ってたたかった。つまり律法学者、

ユダヤ教のエリートたちにより社会の隅に追いやられ、罪人とされた人たちの側に寄り添った。それはいったい何故なのか。これは単に彼が慈悲深い人だったからというだけでは解きあかせない。このことを解明する基本的な事実は、イエス自身が、その出生のときから疎外され、排除され、社会的に差別された者だったということである。つまりイエスは三つのものから疎外されていた。まず第一に彼の家族から、次に彼の生れたナザレの町から、そして第三に彼が生きたユダヤ教社会から。このことを見逃して、イエスの生涯を根柢から捉えることはできないと思う。にも拘らず、このような視点からイエスを見た先行研究を寡聞にして筆者はいずこにも見出していない。

まず第一のことから見てゆこう。イエスは父ヨセフのことをどこでも言及していない。この全くの沈黙は何を意味するのか。（イエスが「父」Abbā）とよびかけたのは常に「神」のみである。）さらにイエスがガリラヤで宣教していたとき、イエスの母マリアと彼の兄弟がやって来て外に立ち、人々にイエスを呼ばせた。その人たちが「ほら、お母さんと兄弟が外であなたを捜しています」とイエスに告げた。するとイエスは答えていった。「わたしの母、わたしの兄弟とは、いったいだれのことなのか。」そして周りに座っている人々を見回して「見よ、ここにこそわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の意志を行う人が、わたしの兄弟であり、姉妹であり、また母なのだ」と宣言している（「マルコ」Ⅲ、31—35）。イエスには下に四人の弟といく人かの妹がいたことが知られているが、彼らはヨセフとマリアの子であったであろう。イエスは長男でも誕生の事情を異にしており、何か彼らとしっくりしないものがあったであろう。イエスは母マリアと自分の家族につめたい。またその母、家族、身内のもの（οἱ παρὰ αὐτοῦ）も、イエスのことを聞いて、「取り押さえ」（κρατῆσαι）に来たというのも、「彼が気が変になっている」と思ってのことであった（「マルコ」Ⅲ、21—22）。このようにイエスは、その家族から疎外され、自らも彼らにある種のよそよそしい距離感をもっていたことが考えられる。

第二に彼はナザレに生まれ、ここで育ったにもかかわらず、その活動はナザレでは認められず、むしろナザレから離れたガリラヤ湖畔を活動の拠点とした。つまりナザレでは、あまりにも彼の素性は知られすぎており、活動しにくかったかも知れない。実際彼は言っている。「預言者は自分の故郷、自分の親戚、自分の家族の間では、敬われない」（「マルコ」Ⅵ、4）。結局ナザレでの宣教は成功しなかった。むしろそこでは人々は「こいつは大工で、マリアの息子ではないか。ヤコブ、ヨセフ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。妹たちはここで我々と一緒に住んでいるのではないか」（「マルコ」Ⅵ、3）と言って相手にしなかった様子がうかがえる。

第三にユダヤ社会からの疎外については、彼の言動がつねに、この社会の指導者、律法学者たちから監視され危険視され、ついに機をみて告発の対象にされたことによって、余りにも明白である。彼がユダヤ社会で疎外された弱者の側に立ち、おざなりの律法擁護者たち、神殿の支配者たちに反感をもって、かれらに挑発を行ったということは、彼がこの社会に対するよき意味での批判者であったが、これを別の言い方をすれば、その権力機構からの「はぐれもの」であったことを示している。

この三重の意味での疎外状況は、イエスの行動や生涯を理解するには、きわめて重要であると筆者は考えている。

ところでイエスの誕生以後、洗礼者ヨハネに出会う三〇歳頃まで、彼はいったい何をしていたのだろう。（何で糊口をしのでいたのか。）これについて知れるところは少ない。

しぶしぶイエスを息子として受け入れた父ヨセフは「大工」（τέκτων）であったとされている。しかしここに言う大工とは、建築にたずさわるような ἀρχιτέκτων ではなく、木工を主とする道具づくりの意味である。イエスは小さいとき、この大工の仕事をうけついだであろう。しかも船大工の方向にむかったと思われる。彼の活動がガリラヤ湖畔であり、ここではじめて、魚に網を張っていた漁師シモンとアンドレに、魚ではなく「人間を漁（すなど）るものにしてあげよう」（イエスのたくみな冗談）と話しかけ、二人がすぐにそれに従ったのも、それ以前から船の修理などで彼らと親しくなり、その信頼をかち得ていなければ不可能であろう。後にみられる湖畔でのさまざまな奇跡も、この職業と関係していると思う。

さらにもうひとつ推測できるのは、ヨハネに出会う前にイエスは医術（と言っても主として心理療法で魔術に類するもの）を習得していたことである。これは山形孝夫氏が指摘しているように[8]、イエスの登場はその治療活動とともに始まるのであり、これはなんらかのそうした実践訓練がその前に積まれていなくてはならなかった筈である。これは氏の言うように、ガリラヤ地方に隣接していたテュロスやシドン、とくに後者にあるエシュムン神殿において行われていたアスクレピオス医療団の活動に接触していた可能性が大きいだろう。アスクレピオス医療団は当時いろいろなところに進出していたが、その本拠地はバルカン半島の東岸エピダウロスである。ここで近年発掘された碑文によれば、そこで行われた治療は外科的なものが多かったようだが、なかには神殿の治療所で眠らせて夢の中でさまざまな精神的疾患を治してしまう魔術的治療もあった。中風や失明の治療などイエスの治療活動と部分的に重なるところもある。

当時のガリラヤはローマの政治的経済的支配下にあり、統治者ヘロデス・アンティパスとイェルサレムを中心とする神殿階

級の差別と搾取により、きわめて悲惨な状態にあり、精神的圧迫と結びつく多くの病人が氾濫していた。イエスはこの状態をまず改善することから、彼の宣教を開始した（この詳細については次節参照）。

彼が成長期にどんな教育をうけたかは分らないが、ナザレの教会堂（シナゴーグ）の集まりによく出席し、多分アラム語訳で旧約聖書の内容を学んでいたであろう。とくに「イザヤ書」「詩編」など熱心に暗記していた（「エローイ、エローイ、何故に見捨て給いしか」）。

一二歳のとき、両親とともに過越の祭りに参加するためイェルサレムに行き、そこで両親とはぐれてしまうが、それは彼が神殿で学者たちに質問し、議論に入りこんでしまったためという云い伝えが残されている（「ルカ」Ⅱ、41―51）。このとき母マリアは彼をさがし当て、「まあなぜこんなことをしたの。お父さんもわたしも心配して捜していたのよ。」というとイエスは答えた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのはあたりまえということを知らなかったのですか。」両親はこの言葉の意味をすぐには悟らなかったが、母マリアはすべてを心の中に納めたと「ルカ伝」は述べている。読み方によっては、イエスにとって父とは神であって、ヨセフではないということを含意するのかも知れない。

（ii）洗礼者ヨハネとの出会い

イエスの宗教活動は、洗礼者ヨハネとの出会い以前には少しも知られていない。洗礼者ヨハネは祭司階級の出であったが、神殿体制から離れ、もとは当時同じくこの体制から離脱して野外の洞穴で清貧の集団生活を行っていた「エッセネ派」[9]に属していたと思われるが、それからも脱出してひとり荒野に出て、人々に終末の到来をひかえての「悔い改め」と説き、ヨルダン川のほとりで洗礼（からだ全体を水にひたす、むしろ浸礼）を行っていた。「らくだの毛の衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」（「マルコ」Ⅰ、6）。この預言者の出現は、ティベリウス帝の治世第一五年（後二八年）のことだとされている（「ルカ」Ⅲ、1）。イエスはこのころヨハネのうわさをガリラヤのナザレで聴き知り、多分デカポリスのヨルダン川沿いのベタニアで彼に会い、彼の洗礼をうけた。イエスがヨハネと出会ったのは、このときが初めてであり、かねてヨハネとイエスが甥同志の関係であったというのは、すべて「ルカ伝」のつくり上げた話で、事実ではない[10]。事実はイエスがヨハネの終末の予言とその「悔い改め」の宣教に魅せられ、この集団の下に参じヨハネの弟子になったということであろう。イエスがガリラヤにおける最初の宣教の宣言「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（「マルコ」Ⅰ、15）など、ヨハネ

の口うつしである。

ところがそのヨハネは、彼が活動したペレア地方を治めていた領主ヘロデス・アンティパス（Herod Antipas, Ἡρῴδης ἑτεροδίδαχης 後三七年頃没）によって、その妻ヘロディアス（Herodias, Ἡρῳδιάς）の娘サロメ（Salome, Σαλώμη）をつかった周知の陰謀で殺されてしまう。ヨハネはアンティパスが自分の兄弟の妻を奪って我がものとしたことを決して良しとしなかったからである（「マルコ」Ⅵ、14―28）。あるいはヨハネが民衆の間にあまりにも大きな影響を及ぼしていたのを知り、長く牢獄に入れておいて謀反などが起るのを恐れて殺してしまったというもうひとつの言い伝えの方が、より真相をとらえているかも知れない。

福音書の記述者にとって、イエスがヨハネに弟子入りしたというのはまずいので、「わたしより優力な方（イエスを指す）が、あとから来られる。わたしはその人の履き物のひもを解く値うちもない。」（「マルコ」Ⅰ、7―8）とヨハネに語らせている。そしてイエスがヨハネの洗礼を受け、水の中から上ると、天が開け、聖霊が鳩のように下りてきて、「この者はわたしの愛する子であり、わたしの意にかなうものである」という声が天から聞こえたとされている（「マタイ」Ⅲ、16―17）。このことは事実としてどのようなものであれ、以後のイエスの宣教にとって確信を与える契機となったことの象徴的表現と云える。

ついでイエスは荒野に出て四〇日間の修業を行うが、これはヨハネの方針に従ったものであろう。イエスと先駆者ヨハネの出逢いは、ヨハネの「終末思想」と「悔い改めによる罪のゆるし」ということにおいて、イエスに大きな影響を与えた。というよりも、ガリラヤにおけるイエスがすでに気づいていたことを、ヨハネにおいて確認したと云うべきか。しかしこの終末の予言やそのための罪の赦しの実践などは、本来神殿の宗教者が行うべきもので、勝手に個人がよびかけ、実行すべきものではないと考えられていた。従ってこのヨハネの終末論的「悔い改め」をすすめる行いは、反神殿的越権行為であった。しかしそれは、神殿の祭祀におもむく余裕もない追いつめられた貧しい人たちの間では、大きな人気を得て、勢力を拡大していった。イエスもこの路線の上に歩み出す。

（ⅲ）イエスの宣教

ヨハネが捕えられたころ、イエスはガリラヤに帰り、自らの宣教を始めたようだ。ヨハネからはその「終末思想」や「悔い改めによる罪の赦し」について大きな影響をうけたが、その宣教の方法や内容はかなり異なっていた。

まず第一にヨハネは洗礼を重視し、この特徴のゆえに人々を引きつけたが、イエスの場合は、洗礼は行わない。心は心自身と行いそのものによって清められるのであって、身体の清めと

は関係がない。

第二にヨハネは罪の赦しを得るために、荒野（砂漠）に出ることをすすめたが、イエスはむしろ荒野ではなく、町のなかに入っていった。荒野の修行は必要とされなかった。むしろ断食や厳格な禁欲はそこでは重んじられない。ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々が断食をしていたとき、人々はイエスのところに来て、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのかとたずねると、イエスは答えた。「花婿がいっしょにいるのに、婚礼の客が断食できるだろうか」（「マルコ」Ⅱ、18―19）。また「人の子（イエス）が来て、飲み食いすると、『見よ、大食漢で大酒飲み、税金取りや罪人の仲間だ』という。しかしその知慧（ソフィアー）はそれの働きによって正しさが認められている」（「マタイ」Ⅺ、19）。どうもイエスとヨハネでは、救済への生き方という点で異なるものがあったようだ。実際、「汝の胎より生れたものとして、洗礼者ヨハネより偉大なる人物は現われなかった。しかし天国においては、最も小さきもの（ホ・ミークロテロス）でも彼よりも偉大なのだ」というイエス自身の言葉もある（「マタイ」Ⅺ、11）。

第三にイエスはその宣教において、病人の治癒ということを実践した。これはヨハネにはまったくないことである。

ガリラヤ湖畔で漁をしていたシモン（後のペトロ）とアンドレアス、およびゼベダイの子ヤコブとヨハネを誘って弟子にしたイエスは、まずカファルナウムの会堂で精神病の男から悪霊をおい出して治した。ついでシモンのしゅうとめの熱病を治した。その後カファルナウムと離れてガリラヤの各地をめぐり、皮膚病、中風、手の麻痺した人、耳のきこえない人、舌の回らない人、目のみえない人などを治して歩いた。これらの病人の多くは、当時のガリラヤにおける経済的搾取、社会的圧迫などにより苦しい状態にあり、こうした社会状態の悪化から心身を病み、身体的不調に陥っていたと思われる。イエスはそうした社会から疎外された弱者、心がおかしくなっている人々にいたく同情し、その人たちを大いに「あわれんで（スプランクニスティス）」治療を行ったと思われる。この σπλαγχνίζομαι という動詞は重要で、これは「我が身そのものが痛む」という意味をもち、単なる傍観者的なものではない[11]。

当時、病気は罪によるとされ、病人は罪人でその中に悪霊が入りこんでいると信じられた。イエスはまずこの病人＝罪人という概念に反駁し、これに入りこんだといわれる悪霊を追放した。このイエスの「あなたは罪から解放された」という一言が、この病人（おもに精神的疾患によるもの）を回復させたことは、十分理解できよう。

しかしこのこと、つまり「罪から解放する」ということは、神殿宗教者のみに許された権能であって、その資格のないものがこうした治療を行うことは、重大な違反行為であった。イエスが神殿宗教者によって捕えられ、殺された遠因の一つはここ

にある。

イエスはこの治療上の奇跡のほかに、さまざまな奇跡を行ったと伝えられている。たとえばガリラヤ湖畔の「水上を歩いた」というものがあるが、これはもともと船大工であったイエスがつくった一寸した小さな板きれイカダのようなものに乗っていたということかも知れない。また五千人の人を五つのパンと二匹の魚を分けて人々を満腹させたというのも、イエスにつき従った人々の間で、このことを予想して食料をたずさえて行き、イエスが五つのパンと二匹の魚を分けたとき、その食料を皆で分け合ったのかも知れない。しかしこうした奇跡の合理化を一々やってゆくよりも（それらは所詮想像にすぎない）、このような奇跡を当時の人々が信じたということ、さらに重要なことは、イエスがもっていた、苦しんでいる人々へ憫隣の深さであろう。

そしてイエスの「宣教の内容（ケーリュグマ）」（κήρυγμα）はどのようなものであったのか。これは「マルコ伝」だけでは明らかでないが、これについてはⅢ章「イエスの思想」のところで、他の資料も用いて精述する。しかしこの軌跡そのものがすでに宣教の一部であったことはたしかである。つまりイエスの宣教は単に言葉だけではなく、実践を伴っていた。実践が宣教であった。この実践の成功によって、イエスはこの世から悪霊が追放され、神の国が近づいていることを実感したのであろう。またそこにおける自己の役割を自覚したであろう。貧者、弱者、罪人の社会的差別を排除しようとするイエスの宣教における大胆な言動は、ユダヤ神殿体制の根本をゆるがすものとして、その保持者たちに次第におそれられ、放置できないものとなっていった。[12]

（ⅳ）十字架の死

イエスがガリラヤにおいて宣教をはじめてほぼ一年たったとき、イエスは一二人の弟子その他とともに、イェルサレムにおける過越祭に向う。これが一体いかなる意味を有しているのだろうか。ガリラヤにおけるイエスの活動は、つねにこの地におけるファリサイ派律法学者やヘロデ党のものたちによって監視され、イェルサレムの最高法院（サンヘドリン）に報告され、機会があれば彼らはイエスを捕えようとしていた。しかし、ガリラヤにおける民衆たちの間のイエスの人気の高さは、なかなかその機会を与えなかった。加えて当時ガリラヤを支配していた政治的権力者ヘロデス・アンティパスは、イエスをヨハネの再来者と考え、その命を狙っていたと考えられる。イエスもこの危険を感じていたであろうが、いささかも怯むところがなかった。むしろそうであるなら、すすんで自らイェルサレムに赴いて、直接その宗教指導者に向って、日頃いだいていた彼の憤慨をぶつけてみようと決意したのかも知れない。そこでの彼の

言動が物議をかもさない筈のないことを、イエスは自覚していただろう。のみならず、その結果として生ずる死のおそれも、ある程度予想していたかも知れない。しかしまさか十字架の処刑に出会うことまでは考えていなかったであろう。なぜならローマの支配者による十字架刑は、本来ローマの帝国支配に関する政治犯に適用されるものであり、イエスはこのローマに対する政治的反逆を明らさまに表明したことは一度もなかったからである。（この嫌疑は「サンヘドリン」の宗教指導者によってつくり出された「ユダヤ人の王」という捏造された罪名がもとになっている。）

ともあれ、それはイエスにとって決死行というべきものだったろう。イエスの弟子たちはイエスのこの決然たる態度に驚いたが、そのあとについて行った。イエスはイェルサレムに近づくと一匹の子ろばを求め、それに乗ってこの門をくぐった。救世主と思った一部の市民は「ホサナ」（おお救い給え）と云って歓迎した。翌日彼は神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替屋の台や鳩を売る者の腰かけをひっくり返した。そして云った「「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」（「イザヤ書」LVI、7）のに、ところがお前たちはそれを強盗の巣にしてしまっている」（「マルコ」XI、15—16）。また弟子たちがヘロデの神殿の壮麗さに驚いていると、「そんな手で造られたものは壊してしまえ。三日間で私は手では造られない別の神殿をたててみせる」とも云ったと伝えられる。

祭司長たちや律法学者は、この神殿体制を破壊しようとする男を殺させばならないと考えた。そしてイエスにたずねた。「なんの権威（ἐξουσία）に基づいて、そのようなことをするのか。だれがそうする権威を与えたか。」イエスは答える。「それでは一つたずねるから、これに答えなさい。ヨハネの洗礼は神からのものか　人からのものか。」彼らは「分らない」と答えた。「神から」と云えば、「それなら、なぜヨハネを信じなかったのか」と云われ、「人から」と云えば、ヨハネを信じている群衆の反撥を怖れたからである（「マルコ伝」XII、14—17）。イエスにとっては、「権威」（ἐξουσία）とは語義通りの「外にあるもの」ではなく、まさにイエスの心の内部にあるものであり、何かその外にあるあれこれではない。

また律法学者やヘロデ党のものが、イエスをおとし入れるために、「ローマ皇帝に税金を納めるべきか、それとも納めなくてもよいだろうか」とたずねた。イエスは答えた。「デナリオンの銀貨をもって来て見せなさい。」彼らがそれももって来ると、「これはだれの肖像と銘か」とたずね、彼らが「皇帝のもの」と答えると、イエスは云った。「皇帝のものは皇帝へ、神のものは神へ」（「マルコ」XII、14—18）。これはイエスの政教分離の思想を表わすとされているが、この問答のなされた状況を考

えると、イエスはいったん問いの的をはずし、ついで「皇帝は税をとり立てているように、あなた方は神の名でたくさんのものを人々から奪いとっている」という皮肉だとする、田川建三氏の見方は、案外真実をうがち得ているかも知れない。

この後イエスは、あらかじめ定められていた家の二階に一二人の弟子たちを集め、いわゆる「最後の晩餐」をもつ。このときユダの裏切りを予言したことは、広く知られている。[13] それからイエスはイェルサレム域外のゲトセマニに行き、ペトロとヤコブとヨハネをつれてゆき、目を覚しているように云って、一人離れて最後の祈りを行っている。それは次のようなものだった。

「アッバー、父よ、あなたにはなんでもできます。どうかこの杯をわたしから取りのけて下さい。しかしわたしの望むところではなく、あなたが望むことをなさって下さい。」

そしてイエスが戻ってくると、弟子たちは眠っていた。

そのときユダが、神殿の祭司長、律法学者、長老たちが遣した群衆も、剣や棒をもってやって来た。それを導いたユダはイエスに接吻して、「この人だ、つかまえて逃がさないように連れてゆけ」と示唆した。人々はイエスをつかまえた。居合わせた一人だけが剣を抜いて大祭司の手下の片方の耳をきりおとしたが、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった。

人々はイエスを最高法院（サンヘドリン）の大祭司のところに連れていった。祭司長、長老、律法学者たちが皆集り、イエスに不利な証言を求めたが、それはさまざまで一致したものはなかった。そこで大祭司カイアファース（Kaiaphās）はイエスにたずねた。「お前はほむべき方の子、キリスト（ὁ χριστός）なのか。」イエスは答えた。「わたしはそれである（ἐγώ εἰμί）」（「マルコ」XIV、61—62）。

これがイエスが「キリスト」（救世主、メシア）であることを認めたとされる唯一の箇所である。しかしこれはイエス＝キリストということを前提とした後の写本家の手によるものかも知れない。[14] 実際、別の箇所では（「マタイ」XXVI、63—64）では、大祭司の同じ問いに対し、イエスの答えは「それはあなたが云ったことです（σὺ εἶπας）」であり、こちらの方がイエスの言葉通りであっただろう。もう一つの箇所でも、同じ状況でイエスが答えているのは「あなたがたがそう云っている（ὑμεῖς λέγετε）」である（「ルカ」XX、71）。

そこで大祭司は「この冒涜の言葉をきいた。どう考えるか。」とたずねた。最高法院の一同は死刑にすべきだと決めた。そこで夜があけると、大祭司はイエスを縛ってローマから派遣されたユダヤ属州総督ピラトゥス（Pilatus 在職二六—三六年）のところへつれていった。（死刑にする権利は大祭司にはなかったからである。）ピラトゥスは、「お前は「ユダヤ人の王」（ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων）か」とたずねた。イエスは「それ

はあなたが云っていることです。（σὺ λέγεις）」と答えて、それ以上は何も云わなかった。そこでピラトゥスは、祭りのたびに一人の囚人を釈放する方針に従って、もうひとりの囚人バラッバース（Barabbās）をつれてきて、どちらを釈放するかはかった。群衆はすべて祭司長らに扇動されていたのでバラッバースの方を釈放してほしいと云った。[15]「それでは「ユダヤ人の王」とお前たちがよんでいるあの者はどうして欲しいか」と問うと群衆は「十字架につけろ」と叫んだ。ピラトゥスは、群衆を満足させるために、バラッバースを釈放し、イエスを兵士たちに引き渡した。イエスは紫の服を着せられ、茨で編んだ冠をかぶせられ、処刑の行われるゴルゴダの丘につれてゆかれた。

イエスは午前九時ごろ紫の服を脱がされ、十字架につけられた。人々は祭司長や律法学者と一緒になって、「他人を救ったのに自分を救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐに十字架から降りてくるがいい。それを見たら信じてやろう」とイエスをあざけった。昼の一二時に地上全体が暗くなり、それは三時まで続いた。そのときイエスは急に「エローイー、エローイー、ラマー、サバクタニー（我が神、我が神、なぜにあなたはわたしを見捨てたのですか）」[16]と大声でさけんで息たえた。

これは救世の神、アッバーを信じ続けてきたイエスが、ついにその願いを実現できずに死んでゆくことに対する、彼の最後の絶望の叫びであったであろう。

このイエスの死は、当時の最大の碩学といわれたアレクサンドリアのフィロン（Philōn, Φίλων 前三〇―後四五頃）の書物のどこにも一言もふれられていない。これはパレスティナ地方の目立たない小事件として、歴史的にほうむり去られるかに見えた。

しかしそうとはならなかった。イエスは「復活（エゲルシス）」（ἔγερσις）したのである。イエスが死んで三日目の日曜日（イエスは過越祭の安息日の前日、金曜日に処刑されている）に、イエスにつきそって来て十字架の処刑を目にし、遺体のおさめられるのを見とどけた女たち――マグダラのマリヤと小ヤコブの母マリアとサロメがイエスの遺体に油をぬるための香料を買って、墓の入口に向かった。ところが墓の入口の石はすでに横にころがされており、中には白い長い衣を着た若者がすわっていて、彼女らに云った。「驚くことはない。あの方は復活されて、ここにはいない。」「さあ、行って弟子たちとペテロに告げなさい。『あの方はあなたたちより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』と。」

このことはいったい、どのようなことを意味するのだろうか。筆者の推測では、この墓の石をとり除いたのは、ピラトゥスに申し出てイエスの遺体を引取った最高法院の議員ハリマタヤのヨセフであろう。彼はイェルサレム郊外の岩にまず急いでイエスを仮埋葬した後で、自分の土地に移して本格的な供養を

したのであろう。[17]

しかし「マタイ伝」（XVI、9―10）や「ヨハネ伝」（XX、14―18）では、マグダラのマリアがまず実際に復活したイエスに出会ったことになっている。これはイエスが処刑されたあと、「絶対にイエスは死んではならない」と堅く信じたマリアに、幻想となって現れたのであろう。その後マリアはガリラヤに赴き、ペトロなどの使徒にこの復活を伝えた。彼らはマリアの証言を信じ、また実際に肉体をもったイエスに出会い、彼が天に昇ってゆくのを信じた。

つまりは、マグダラのマリアに発し、弟子たちの心の中にイエスは復活したのである。これが原始キリスト教の出発点となる。その際イエスその人が考えもしなかった想定が、彼らに共有された。それはイエスが人間のもともともっていた罪＝原罪を背負って死んでくれた、それゆえに彼らはもうこの原罪から解放されているという思想である。この原始キリスト教の思想をうけつぎ、発展させたのはパウロである。[18]

さてそれでは、当時のイエスの弟子たちの間に復活し、現在のキリスト教徒のなかに生きつづけているのみならず、我々キリスト教徒でないものにも、強くうったえかけるイエスそれ自身の思想とはどのようなものなのか、それを次章以下でとり上げよう。

Ⅲ　イエスの思想

（i）終末の思想

洗礼者ヨハネが捕らえられたのち、イエスがガリラヤで宣教をはじめた第一声は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」（「マタイ」I、15）であった。これはまだヨハネの言葉のほとんど引きうつしであったが、彼もまた終末思想を信じていたことは疑いない。ここに「神の国」（βασιλεία τοῦ θεοῦ）とは神の支配ということで、これは空間的なものではなく、精神的なことを云っている。

神が世の終りに世界を支配するという考えは、当時のユダヤ教にもひろがっていたが、イエスの終末観は、ユダヤ教のものとは本質的に異なっていた。ユダヤの預言者たちの終末の予言は、いずれもユダヤ人社会の再興、復権と結びつき、その政治的な意味合いをもっていたが、イエスの終末観にはこの民族主義的色彩は皆無である。ユダヤ民族の独立や他民族への優越などという民族的関心ではなく、あくまでも一人の人間の生き方を問題にしている。つまりそれは神の支配の下で、人間はいかに生きるべきかを常にとり上げているのである。

第二に洗礼者ヨハネにおいては、終末はまだ到来しない未来（近い）のことと考えられ、これへの準備がもっぱら慫慂された。

しかしイエスにおいては、彼の活動そのものによって、終末はすでに来ていると感ぜられていたふしがある。彼がその奇跡の成功や悪魔がとりはらわれたとされている実状によって、終末の救済はすでに始まっているとするのである。

「しかしもしわたしが神の指（δάκτυλος）で悪魔を追い出しているのなら、それこそ神の支配はもう先んじてあなたたちの所に来ている（ἔφθασεν）」（「ルカ」XI、20）。

その他この終末をさまざまな天変地異的な表現で、弟子たちに語っているところもあるが、肝心なことは、この神の国の到来は、なんらかの外の現象ではなく、精神の内部のことだということである。

「神の国は、観察されるような仕方で（μετὰ παρατηρήσεως）来るものではない。また「見よ、ここにある」「あそこにある」などとはいえない。なぜなら、見よ、神の国は、実にあなたがたのただなかにある（ἐντὸς ὑμῶν ἐστιν）のだから」（「ルカ」XVII、20―21）。

つまり神の国の到来は、実現しつつあり、それは人々に新たな生き方　考え方　人生の選び方をせまっているのであり、決して外部の事柄ではないのである。

第三に、それではイエスはこの神の国を到来によって現れる「救世主」（ὁ Μεσσίας）として自ら意識していたのであろうか。これは微妙な問題である。イエスは自らを「メシア」であるとはどこでも云っていない。[19] むしろペテロが「あなたはクリストである」と云ったとき、それをたしなめている。イエスはこの終末の救済に立ち合い、それをもたらすことに自己の役割を認めてはいたが、自分自身を世のいわゆる「救済者」などとは考えてはいなかったと思われる。

（ii）律法観

当時のユダヤ社会において、中間層としてユダヤ人一般の信仰を監督し、監視し、忠告を与えていたのはファリサイ派の「律法学者たち」（γραμματεῖς）であった。彼らはいろいろな地方の会堂（シナゴーグ）に赴いて、その活動を行っていた。彼らにとって最も重要なことは「律法」（οἱ νόμοι）を守ることであり、またそれらを人に守らせることであった。

洗礼者ヨハネが亡くなり、イエスが活動を始めたとき、イエスも会堂に出かけていった。そこに片手の麻痺した人がいた。彼らはイエスが何をするか見ていた。イエスはこの人に「まんなかに出てきなさい」と云い、人々にこうたずねた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、それとも悪を行うことか。命を救うことか、それとも殺すことか。」彼らはだまっていた。イエスは怒りをこめて（μετ᾽ ὀργῆς）人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に云った。「手を伸ばしなさい。」そこで伸ばしてみると手は元どおりに治

った。するとそれを見ていたファリサイ派の人々はそこから出てゆき、ヘロデス派の人々と一緒になって、どのようにしてイエスを亡きものにするか相談をはじめた（「マルコ」Ⅲ、1―6）。

これは安息日には働いてはならないという律法があるのに、これを公然と無視して治療を行ったことは、許せない掟やぶりとして生かしてはおけないというのが、ファリサイ派の考え方である。これに対してイエスは、困っている人、苦しんでいる人がいたら、それを治してやることは安息日であろうとどこが悪い。安息日として許されているのは、善いことをすること、命を救うことであって、これを禁ずる律法の形式的墨守によって、人間のかたくなな心の石化（ἡ πώρωσις τῆς καρδίας）が起り、それが人間の素直な心情をまげてしまうことに、イエスは怒った。

こういうこともあった。ある安息日にイエスが麦畑の中を通っていると、弟子たちが歩きながら麦の穂をつみはじめた。するとファリサイ派の人々はイエスにたずねた。「なぜ彼らは安息日にしてはならないことをするのか。」イエスは答えた。「ダビデが自分も部下も食べ物がなく空腹だったとき何をしたか。……祭司のほかは食べてはならない供え物のパンを食べ、一緒にいたものたちにも与えたではないか」（「ルカ」Ⅳ、2―4）。

麦の穂をちょっとつまんで口に入れたというささいなことまで、安息日の律法に反するとするファリサイ派のいいがかり的な杓子定規に、イエスはがまんがならず反論した。

そもそも「安息日というものは、人間のためにつくられたもので、人間が安息日のためにあるのではない。」だから安息日に何をしていいのかあるいはいけないのか、人間を助け導くために「人の子」（イエス自身）が決めてよい。つまり「人の子が主である」（「マルコ」Ⅱ、23―28）。

これもまたファリサイ派の人々の反撥をかったであろう。一般に「彼ら（ファリサイ派や律法学者）はいろいろな重い荷物をたばね、人間の肩の上に載せるが、自分ではそれを動かすために指一本も貸そうとはしない。」（「マタイ」ⅩⅩⅢ、4）ファリサイ派の律法学者は、律法で人々をがんじがらめにするが、彼ら自身は指一本動かしてそれを軽くしてやろうとはしない。律法主義、権威主義の冷たさがここにはある。

「わざわいなるかな、律法学者たちやファリサイ派の人々は偽善者だ。君たちはハッカやイノンド、ウイキョウについて十分の一をささげるが、律法でもっとも重要なもの、公正（クリシス）（κρίσις）、憐れみ（エレオス）（ἔλεος）、信義（ピスティス）（πίστις）をないがしろにしているからだ。実はこうしたことこそ行なわなければならない」（「マタイ」ⅩⅩⅢ、23）。

「わざわいなるかな、律法学者たちとファリサイ派の人々は偽善者だ。君たちは白く塗った墓に似ているからだ。こういう墓は外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで

いっぱいである。外側は義なる人のように見えるが、内側は偽善と不法でいっぱいだ」（「マタイ」XXIII、27―28）。

イエスは当時のユダヤ社会に広まっていたこのようなうわべだけの偽善、ファリサイ派的律法主義に反撥した。

もっともイエスはモーセの律法その他を排斥しようとしたのではない。むしろそれを完成しようとして来たのだと云っている。イエスにとって律法とは、神が人間のために定めた「愛と憐憫と公正の掟」であるのに、かえってその律法によって人々を差別し、苦しめ、いやしめる非人間的な形式主義におちていることに、イエスは我慢がならなかった。

実際イエスは生地ガリラヤにおいて、こうした形式的律法主義の体制による差別や疎外や搾取の現実を目の前にしていた。

（iii）「地の民」へのまなざしと神殿批判

イエスが生きたガリラヤ地方には、ユダヤのイェルサレムとは異なり、この地方特有の多くの差別された人々、疎外された人々、貧しい人々、さげすまれた人々がいた。彼らはユダヤの領主、有力者からの収奪、イェルサレムの中央神殿体制から搾取によって追いつめられ、律法を守ろうにも守る余裕がなく、中央のユダヤ上層階級（サドカイ派宗教省ら）、中産階級（ファリサイ派律法学者ら）から「地の民（アム・ハーアーレツ）」（ʻam hā ʼareṣ）と蔑称されていた。イエスはとりわけこの差別されていた「地の民」に、やさしいまなざしを向けた。具体的には病人、貧者、取税人、娼婦たちである。

まず病人は、当時の社会の圧迫から精神の病いをきたし、それに帰因するさまざまな肉体的病気（中風、皮膚病、口がきけない、目が見えないなどの疾患）にわずらわされていた人々がいた。それらの病人は罪人（ἁμαρτωλός）であるとされ、罪（ἁμαρτία）によって病人になっているとされていた。イエスはこういう人たちを放置できず、そこから罪のもととなっている悪霊（πνεύματα δαιμονίων）を追い出し、罪が消えたとして、病人を治した。こうしたこともファリサイ派の人々によれば、罪をゆるすという権利を、勝手に私的に行使しているものとして見逃せるものではなかった。罪をゆるすということは、中央の最高法院にのみ属する権能であるからである。

またそこには多くの貧者がいた。ガリラヤ湖畔には生産力の豊かな沃野が広がり、多くの食糧を供給したが、このことがかえって、ユダヤの領主や有力者がここの土地の多くの占有を試み、中央の権力体制の収奪の対象にもなって、貧困層を生み出す結果となっていた。

また取税人は、税をとり立てる多くは下級収税吏で、この職掌のゆえに人々に憎まれ、社会から疎外され、しばしば罪人と同じ扱いをうけていた。しかしイエスは彼らをも排除せず、仲間にうけ入れた。

娼婦はもちろん「神に背き、神から離れたもの」、律法をおかすものとして、軽蔑され、迫害されていたことは云うまでもない。これについては、「ヨハネ伝」に次のような一節が挿入されている。

律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れてきて、人々の前に立たせ、イエスに云った。「この女は姦通しているときにつかまりました。こういう女は石で殺せと、モーセは律法で命じています。さてあなたなら何と云いますか。」イエスはかがみこみ、指で地面に字を書きはじめた。しかし彼らがしつこくきくので、イエスはようやく身を起こして云った。「あなたたちのうち罪を犯したことのない人が、まずこの女に石を投げなさい。」これを聞いた者は、年長者からはじまって、一人また一人と立ち去って、イエスだけがとり残された。そこでイエスは云った。「さあ、みんなはどこにいるのか、だれもお前を罪に定めなかったか。」女が「主よ、だれも」と答えるとイエスは云った。「わたしもお前を罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」（「ヨハネ」Ⅷ、3―11）。

イエスは世の貧しきもの、苦しんでいるもの、虐げられたもの、外に放り出されたもの、差別されたものに優しいまなざしを投げかけた。逆に富んでいるもの、おごれる偽善者、形式だけを順守して他をおとしめる傲慢な人々を憎んだ。

イエスは当時のユダヤ社会がもっていた、このような差別と排除と欺瞞・偽善の構造に対して、鋭い批判の目を向けた。その批判は最終的にはイェルサレムの最高法院（サンヘドリン）のもっている権威主義、権力機構そのものに向ってゆくことになる。彼ら宗教貴族は広大な社会的権力をもち、人々から神殿税や一〇分の一税をとり立てながら、他方において貧しく苦しく生きている「地の民」を軽蔑していた。イエスにはそれが真の宗教のあり方とは思えなかった。そしてついには、この差別の本処に向って攻撃をしかけることになる。

イエスもたんに律法の墨守を批判したり、疎外されているものの味方として活動しているだけに止まるならば、あるいは死にまでいたることはなかったかもしれない。しかしイェルサレムの神殿にまでおしかけて反旗をひるがえしたとあっては、最高法院の祭司たち、律法学者たちにとっては、絶対に許すことのできないゆゆしきことで、そのまま生かしておくわけにはゆかなかったのだろう。

イエスのガリラヤにおける人々への「愛」の強さが、ついに彼自身の生死を超えさせてしまったというべきか。

（ⅳ）愛（アガペー）

イエスが当時のユダヤ社会において、疎外されているもの、排除されているもの、蔑まされているもの、貧しいものたち

に、やさしいまなざしを向け、これらの人たちを支え、彼らの側に立ったことはすでに述べた。ガリラヤ湖畔で行った有名な「山上の垂訓」（Sermons on the Mount）は、こうした人々の人生へのエールであり、希望を与える激励であった。

「幸いだ、貧しい人たち、神の国はあなたたちのものだから。幸いだ、いま飢えている人たち、あなたたちは満たされるであろうから。

幸いだ、いま泣き叫ぶ人たち、あなたたちは笑うようになるであろうから」[20]（「ルカ」Ⅵ、20―21）。

この激励はいったいどこから来るのであろうか。それは彼自身が疎外された出自をもつこともさることながら、彼には何よりも苦しんでいる人たちに対する「愛」の心があったと云うべきだろう。しかしこのイエスの「愛」、アガペー（ἀγάπη）とは本質的にどのようなものなのか。また何に由来するものなのだろうか。

まずここにひとつの例がある（善きサマリア人）。ある律法学者がイエスを試そうとして尋ねた。「先生、何をしたら永遠の生命（ζωὴ αἰώνια）を得るでしょうか。」イエスは問い返した。「律法には何と書いてあるか、それをどう理解しているか。」彼は答えた。「『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、おまえの神である主を愛せよ、またおまえの隣人を自分のように愛せよ』とあります。」イエスは云った。「正しく答えた。それを実行しなさい。そうすれば生命を得よう。」

ところがこの律法学者はさらに尋ねた。「それではわたしの隣人とはいったい誰のことでしょう。」（この問いが致命的なことになり、同時にイエスの「愛」の何たるかが明示される。）

そこでイエスは次の話をした。

「ある人がイェルサレムからイェリコへ下っていく途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎとり、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。するとある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行ってしまった。同じようにレビ人もその場所にやって来たが、道の向こう側に通って行った。ところが旅をしていたあるサマリア人は、その人のそばに来ると、同じような強い痛みを感じ（ἐσπλαγχνίσθη）[21]、近よっていって傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をしてやった。それから自分のロバに乗せて、宿屋に連れていって介抱した。そして翌日になるとデナリオン銀貨二枚をとり出し、宿屋の主人に渡して云った。『この人を介抱してやって下さい。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

さてあなたは、この三人のうちで誰が、追いはぎに襲われた人の隣人になったと思いますか。」

その律法学者は答えた。「その人に同情をよせた人です。」そ

こでイエスは云った。「行ってあなたも同じようにしなさい」（「ルカ」X、25―37）。

本来の宗教者であるユダヤ教の祭司が、このことが起った道の通りを、わざと避けて黙って過ぎ去り、それにつきそうべき祭祀補助者のレビ人も、そのあとを追って素通りした。その追いはぎに襲われた負傷者に近づいたのは、何と半ユダヤ教徒として軽蔑されていた異邦のサマリア人だった。[22] 彼がその傷ついた人に寄っていったのは、たんに通り一遍のうわべの同情といったものではなく、はらわた（σπλάγχνον）がねじられるような痛みを自らも感じてであった。このように他者の「いたみ」を自己の体のなかにも感じ取るempathyが重要であり、これがイエスの「あわれみ」（ἔλεος）の本質である。それは上からの慈悲などではなく、内からの「共感情」によって感じとられるものであり、自己と他者とのこのような本源的な結びつきを基礎としていると考えられる。

愛には次の三種のものがあると思う。すなわち「アガペー」（ἀγάπη, regard, 尊愛）と「フィリアー」（φιλία, friendship, 友愛）と「エロース」（ἔρως, affection, 情愛）の三つである。第三のものは相手が「好きである」と情に発し、第二のものは相手が「良きものである」という認識に基づく。それに反し、第一のものは、「好き」とか「良い」ということを越えて、自己と他者とのいっそう根源的な「きずな」「結び付き」を基盤としている。この「きずな」はイエスにおいては、神による創造に基づくが、そうした宇宙での自他間の根源的関係にかかわる。[23] 第二、第三の愛、「友愛」や「情愛」においては神が必要ではないが、第一の「尊愛」においては、神がなければならず、神から人への愛があってはじめて、人の人に対する絶対的愛は成立する。

ユダヤ教の伝統のなかにも、「旧約聖書」が示しているように、「愛」（アハバー）（ʾahabāh）はある。[24] これは律法学者が云うように、「汝の神、主を愛せよ」と「汝の隣人を自分のように愛せよ」である。だがこの場合、「汝の神」とは「ユダヤ教の神」であり、「汝の隣人」とは同じく「ユダヤ教のユダヤ人」を指している。従ってこれは自分たちの仲間だけを愛するということになりかねない。イエスはさきに述べたごとく、「良きサマリア人」の話をして、このユダヤ教のもつ閉鎖性を破ってしまった。ユダヤ教の模範となるべき祭司が「愛」を示さず、異教人ともいうべきサマリア人がそれを行った。イエスがここで与えたメッセージの意味は大きい。実のところユダヤ教の「隣人を愛せよ」には、その裏側に「隣人でない人は愛するな」「隣人の外にある人を愛するな」「彼らを敵とせよ」にまでゆく危険をひそかに忍ばせている。この限界を突破したのが、イエスその人である。これがイエスにおける「精神革命」の最終段階となる「汝の敵を愛せ」（ἀγαπᾶτε τοὺς ἐχθροὺς ὑμῶν）であ

る。

「あなたたちも聞いているように、『汝の隣人を愛し、汝の敵を憎め』と云われている。しかしわたしは云っておくが、あなたたちの敵たちを愛し、あなたたちを迫害する者たちのために祈りなさい。それはあなたたちの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しいものにも正しくないものにも雨を降らせて下さるからである」（「マタイ」V、43―44）。

この「愛敵」ということは、ユダヤの預言者の誰も云わなかったことである。他の文明圏の賢者も云わなかったかも知れない。イエスがはじめてこのことを云った。これは現在においても、きわめて重要な意味をもつ。

宗教は自分の神のために、その下に仲間を団結させる。しかしそれは細長く伸びた自分たちの壁を周りに張りめぐらせるだけである。そうしてその壁の外にあるものを敵とみなして戦う。たとえばイスラエルの民とパレスティナの民、中東のイスラム集団と西欧のキリスト教諸国などの対立である。しかしこれはのり越えられねばならない。イスラエルの人々がパレスティナの人々を愛し、中東の人々が西欧の人々を愛し、その逆もまた成り立たねばならない。汝の敵を愛し、汝を迫害するもののために祈って、はじめてそこに真の「平和」が将来するであろう。「平和をつくり出すもの」こそが「神の子」であるからである。この意味において、イエスはいま断じて我々のなかに生きていると云わなければならない。

だがここまで来ると、イエスの神の「愛」とは、ユダヤ教の神のそれではないどころか、それがはたしてキリスト教の枠内にとどまるものなのかどうか、分からなくなってくる。

このことは、大きく見直されなくてはならない今日的問題である。このことを少し拡張してゆくと trans-religion というべき事態になるかも知れない。これは religion を否定するのではなく、anti-religion でも non-religion でもないが、「精神革命」の成果を認めた上で、それを越えてゆく我々自身の課題である。このことはもう歴史的叙述の範囲を出て、現代における宗教の在り方の問題に、我々の考察の歩を進めなければならない。[25]

注

（1）ギリシア名「ガリラヤ」（Galilaiā）は、ヘブライ語の「ガーリール」（Gālīl 地方）の音訳で、「異邦人たち」（Gōīm）の居る所の意味である。ユダヤ教の戒律を受け入れ切れない貧しい「地の民」の住む所として蔑視されていた。「救世主はガリラヤからは出るだろうか」（「ヨハネ」Ⅶ、41）。「ガリラヤからは預言者は出ない」（「ヨハネ」Ⅶ、52）。

（2）佐藤研『聖書時代史・新約篇』岩波書店（二〇〇三）第一章参照。

（3）田川建三『原始キリスト教史の一断面―福音書文学の成立』勁

草書店（二〇〇六）の第二章に、「ガリラヤとエルサレム」の比較がなされている。とくに第三節の「ガラリヤの歴史的特異性」の記述を参照されたい。

（4）四福音書のよび名は、正式名称の「マッタイオスによる福音」（Εὐαγγέλιον κατὰ Ματθαῖον）、「マールコスによる福音書」（E. κατὰ Μάρκον）、「ルーカースによる福音」（E. κατὰ Λουκᾶν）、「イオーアンネースによる福音」（E. κατὰ Ἰωάννην）、をそれぞれ本編では―慣習に従って―それぞれ「マタイ伝」「マルコ伝」「ルカ伝」「ヨハネ伝」と表記する。

（5）救世主（σωτῆρ）はダビデの子孫から生まれるという信仰に合わせて、人為的につくられた系図。

（6）イエースース（Ἰησοῦς）はヘブライ語のイェシューア（Yešū'ah）のガリラヤ発音のアラム語「イェスー」（Yesū）由来のギリシア語表記である。もとの「イェシューア」は「救い」の意で、ユダヤ人の名前としてはありふれたもの。（ヨセフスの著作には二〇人のイエスが登場する。）

（7）オリゲネス『ケルソス駁論』、出村みや子『キリスト教教父著作集』第八巻、教文館（一九八七）、五四ページ。

（8）山形孝夫『治癒神イエスの誕生』ちくま学芸文庫（二〇一〇）

（9）エッセネ派（Essenes）。ファリサイ派（Pharisees）、サドカイ派（Sadducees）と並ぶイエス時のユダヤ教の三大党派の一つ。一切の財産を共有し、厳格な規律遵守の生活を営み、終末を待望した。彼らはもともと体制内宗教者ではあったが、教会組織を離れ、荒野に出て洞窟などに住んで洗礼を行い、独自な共同生活を行っていた。近時（一九四七年以降）死海北西声のクムラン（Qumran）の洞穴群の中から彼らのものと思われる所謂「死海写本」が発見され、その生活内容と信仰形態が明らかにされつつある。これに対して、ファリサイ派は商工業に従事する中間層でモーセによって定められた律法を遵守することを重じた。ユダヤ人の日常生活と最も密に接触したので、イエスの言動としばしば衝突した。サドカイ派は上流の宗教者集団で、富裕層であり、モーセの五書だけを正典として、復活や天使の存在を否定した。イエスとの関わりはあまりなく、代々イエルサレムの祭司職を務める。

（10）ルカは、イエスの母マリアとヨハネの母エリザベートが姉妹関係にあるという長い話を捏造している（「ルカ」I、26―56）。

（11）σπλάγχνον は「内臓」「はらわた」の意であり、ここで「あわれむ」とは、単に「外に向かって」ということではなく、自己の体の内が激しく痛むということである。

（12）イエスの宣教は、福音書に示されているその多彩さによって五年～一〇年の長さに亘るものと感ぜられるかも知れないが、その実質的活動は、後二八年から後三〇年にかけての一年数ヶ月である。それは驚くべき短い時間においてなされた回天の事業だった。

（13）このユダの裏切りについては、はっきりしたことは分からない。もともとユダは他の使徒と異なりガリラヤ出身ではなく、遠く離れた死海東のカリオテの出身で、他の使徒との一体性を欠いていた。しかし計算の能力があってイエス集団の会計を担当していた。はじめはイエスの新しい言動に魅せられこの集団に加わったが、後にその余りの過激さについてはゆけず、他の使徒とも「そり」が合わず、違和感をもったのかもしれない。イエスもこの予徴を気付いていたのだろう。なおこの問題に関しては、荒井献『ユダとは誰か』講談社（二〇一五）を参照。

（14）この問題については、詳しくは田川建三『イエスという男』三

一書房（一九八〇）第六章（13）「人の子―終末論的確信」における論述を参照。イエスが自身を「救世主」と云ったかどうかということより、「マタイ伝」の箇所の続きで、「人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗ってくるのを見るであろう」という救済の確信の記述の方が重要かも知れない。

（15）この群衆（ὁ ὄχλος）というのは神殿体制に依存している人たち（商人、両替人など）であり、かれらはイエスの神殿破壊に恐怖をおぼえていた。これはメシアを待望してイエスを歓迎した一部のイェルサレム市民とは異なるグループであり、この間に矛盾はない。

（16）“ἐλοΐ ἐλοΐ λαμὰ σαβαχθάνι;”（アラム語）（「マルコ」XV、34）。別にヘブライ語の表記のものがある。「エーリー・エーリー・レマー・サバクタニー」（ἠλὶ ἠλὶ λεμὰ σαβαχθάνι;）（「マタイ」XXVII、46）。

（17）彼の出身地ハリマタヤはイェルサレムの北三六キロメートルほどのところにあり、サマリアに近いが、彼はまたイェルサレム近郊にも土地をもっていたようだ。彼は豊かで最高法院サンヘドリンの議員で政治的にも力をもっていたので、ピラトゥスと交渉しイエスの遺体を引きとることができ、それを仮埋葬した後、またその石の扉を開いて、自らの土地にさらに埋葬したかと推定される。

（18）パウロによって新たに設定された思想は第一にイエスの「復活」の信仰であり、第二にイエスの死が「贖罪」の死であるという考えである。それゆえにはじめてイエスは「救世主」キリストとなる。これはカトリック、プロテスタントを問わずキリスト教の根幹となる。従ってキリスト教はイエスの教えというよりも、イエス・プラス・パウロの思想である。本稿では「パウロ以前」のイエス、「キリスト」となる以前のイエスをとり扱ったと云える。そのような試みに果たして意味があるであろうか。私には大いに意味があると思う。神に祭り上げられてしまう前のイエス、「神を信じる人間のイエス」の思いと行動とは、キリスト教徒ではない我々にも深い感動をよび起こし、現代に生きる我々になお強く呼びかけている。

（19）さきにも述べたように、イエスは大祭司に「お前はクリストなのか」と問われたとき、「私は…である」と答えているが（「マタイ伝」XIV、61―62）、これはそれを肯定したのではなく（肯定の言葉はない）、マルコ伝の三つの写本のうち、田川健三がとり上げているカイサリア写本では「あなたはそういう」となっているとのことで、これが原形であろう。注（14）参照。ここで重要なのはむしろそれに続く「あなたたちは、「人の子」が終末の日に、雲の上に乗ってくるのを見るであろう。」で言及されている「人の子」（ὁ υἱὸς ἀνθρώπου）であろう。「人の子」はあくまで「人の子」であって、「神の子」ではなく、救世主でもない。それはイエス自身の自称であり、終末という大転換に、人を助け、人の生活を正しく導くことに貢献する、一人の人間として自らの役割を、強く意識した表現ととりたい。

（20）「マタイ伝」V、3―10には、より詳しい八項目なる周知の「山上の垂訓」がある。

1　幸いだ、心の貧しい人たち、天国はその人たちのものだから。

2　幸いだ、悲しんでいる人たち、その人たちは慰められるであろうから。

3　幸いだ、柔和なる人たち、その人たちは地をつぐであろうから。

4　幸いだ、義に飢えかわく人たち、彼らは満たされるであろうから。

5　幸いだ、あわれみ深い人たち、彼らはあわれみを受けるであろうから。

6　幸いだ、心の清い人たち、彼らは神を見るであろうから。

7　幸いだ、平和をつくり出す人たち、彼らは神の子とよばれるであろうから。

8　幸いだ、義のために迫害されてきた人たち、天国は彼らのものであるから。

「ルカ伝」6章のものと較べると、ここでは「心の貧しい人たち」とか、「義に飢えかわく人たち」のように、専ら精神的なものへと抽象化されている。「ルカ伝」の直接的表現の方が原形であろう。イエスにとっては端的に「貧しい人たち」「飢えている人たち」「今泣き叫ぶ人たち」が問題だったであろう。しかしもちろん、マタイ的抽象化、一般化の表現が無意味なのではない。

(21)　この痛みの現実的共有が、イエスの「愛」にとっては重要であると考える。注(14)参照。

(22)　サマリアはユダヤの北に存し、マカベア戦争のときユダヤ王国に組み入れられた。ユダヤ教ではあるが、ゲリジム山でイェルサレムのものとは違った宗教儀礼を行っていた。アッシリアの侵入によって北イスラエル国が滅びて以後、ユダヤ住民は奴隷として強制的に移住させられ、代って異邦人が多く送りこまれたので、ユダヤ社会の律法は守られず、ユダヤの人々からは「異邦の民」として差別されていた。そのサマリア人が真の「隣人」とされたことは、「隣人」とはユダヤ人相互のことと理解していた当時のユダヤ社会にとっては、衝撃的であったであろう。ここにイエスの「愛」がユダヤ的民族愛から、いっそう普遍的なものに変っていく象徴がみてとれる。

(23)　これについては自己と他者との根源的関係性、エゴイズム・自己中心性の克服を、キリスト教の立場から独自の思索を続けられている八木誠一の諸著を参照されたい。『イエス』清水書院（一九六八）、『増補イエスと現代』平凡社（二〇〇五）その他。

(24)　遠藤徹『〈尊びの愛〉としてのアガペー』教文館（二〇一五）は、「アガペー」の考察のみに一書をあてた貴重な著作で参照さるべきである。しかしそこで「アガペー」の起源がヘブライ語の「アハバー」であることは指摘されていない。ヘブライ語の「アハバー」がギリシア語の「アガペー」に音訳されたとき、その「愛」の意味は大きく変ったと云うべきであろう。

(25)　この方向の筆者の考えの荒筋は、拙稿『世界宗教と科学』金子務監修『科学と宗教―対立と融和のゆくえ』中央公論新社（二〇一八）に示されているが、なおいっそうの詳述が必要であろう。

文献表

1. 佐藤研『聖書時代史・新約篇』岩波書店、二〇〇三。
2. 荒井献『イエスとその時代』岩波書店、一九七四。
3. 荒井献『イエス・キリスト』（上・下）講談社学術文庫、二〇〇一。
4. 田川建三『原始キリスト教史の一断片』勁草書房、一九六八。
5. 田川建三『イエスという男』三一書房、一九八〇。
6. 八木誠一『イエス』講談社、一九六八。
7. 八木誠一『キリストとイエス』講談社、一九六九。
8. 八木誠一『増補イエスと現代』平凡社、二〇〇五。

9. 八木誠一『〈はたらく神〉の神学』岩波書店、二〇〇三。
10. 松永希久夫『歴史の中のイエス像』NHKブックス、一九八九。
11. 高尾利数『イエスとは誰か』NHKブックス、一九九六。
12. 滝沢武人『人間イエス』講談社、一九九七。
13. 笠原芳光『イエス　逆説の生涯』春秋社、一九九九。
14. 山形孝夫『聖書の起源』ちくま学芸文庫、二〇〇九。
15. 山形孝夫『治癒神イエスの誕生』ちくま学芸文庫、二〇一〇。
16. 大貫隆『イエスという経験』岩波書店、二〇〇三。
17. 遠藤徹『〈尊びの愛〉としてのアガペー』教文館、二〇一五。
18. 遠藤周作『イエスの生涯』新潮社、一九七三。
19. 和辻哲郎『原始キリスト教の文化史的意義』岩波書店、一九二六。
20. J-E・ルナン（津田穣訳）『イエス伝』岩波文庫、一九四一。
21. R・ブルトマン（川端純四郎・八木誠一訳）『イエス』未來社、一九六三。
22. G・ヴェルメシュ（木下順治訳）『ユダヤ人イエス―一歴史家の見た福音書』日本基督教団出版局、一九七九。
23. G・タイセン（荒井献・渡辺康麿訳）『イエス運動の社会学』ヨルダン社、一九八一。
24. S・フィナテリ神父『イエズス・キリストの真相』集英社、一九八四。
25. G・コーンフェルト（岸田俊子訳）『歴史の中のイエス』山本書店、一九八八。
26. J・ヒック&P・F・ニッター（八木誠一・樋口恵訳）『キリスト教の絶対性を超えて』春秋社、一九九三。
27. R・ハイリゲンタール（新免貢訳）『イエスの実像を求めて』教文館、一九九七。
28. J・D・クロッサン（太田修治訳）『イエス―あるユダヤ貧農の革命的生涯』新教出版社、一九九八
29. D・フルッサー（武田武長・武田新訳）『ユダヤ人イエス』新教出版社、二〇〇〇。
30. J・D・クロッサン（飯郷友康訳）『イエスとは誰か』新教出版社、二〇一三。
31. T・H・チャールズワース（中野実訳）『史的イエス』教文館、二〇一二。
32. B・D・アーマン（松田和也訳）『書き換えられた聖書』ちくま学芸文庫、二〇一九。
33. H・ヴァルデンフェルス（花岡永子・吉永淳子訳）『キリスト教という現象』大阪公立大学共同出版会、二〇一九。
34. A・シュヴァイツェル（鈴木俊郎訳）『キリスト教と世界宗教』岩波文庫、一九五六。
35. A・シュヴァイツェル『イエスの生涯』岩波文庫、一九五七。
36. Ch・ペロ（支倉崇晴・堤安紀訳）『イエス』白水社、文庫クセジュ、二〇一五。
37. フラウィウス・ヨセフス（秦剛平訳）『ユダヤ古代誌』（5）、（6）、ちくま学芸文庫、二〇〇〇。
38. 『福音書』（塚本虎二訳）岩波文庫、一九六三。
39. 『聖書』（世界の名著12、前田護郎編集）中央公論社、一九六八。
40. 『新約聖書・共同訳』日本聖書協会、一九七八。
41. 『新約聖書・共同訳全注』講談社学術文庫、一九八一。
42. *Novum Testamentum Graece*, cum apparatu critico curavit D. Eberhard Nestle & D. Erwin Nestle, Editio vicesima prima,

Bibelanstalt, Stuttgart, 1952.

43. *Biblia Sacra Vulgata*, recensuit et brevi apparatu instruxit Robertus Weber Osb, Dritte verbesserte Auflage, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1969.

44. *Holy Bible* (New International Version), International Bible Society, Zondervan, Michigan, 1973.

45. *The Holy Bible* (New King James Version), Thomas Nelson, 1982.

46. *New Testament*, American Standard Version and Japanese Colloquial Version（英和対照版）、日本聖書協会、一九六九。

47. 織田昭編『新約聖書ギリシャ語小辞典』大阪聖書学院、一九六五。

48. 古代語研究会編、谷川政美監修『聖書アラム語彙・用例集』いのちのことば社、二〇〇五。

（付）イエスとブッダの比較

筆者の「精神革命―ソクラテス・孔子・ブッダ・イエスの比較研究」のシリーズでは、各論のおわりに、前とり上げられた対象と次にとり上げられた対象との比較を行って来た。「中国における精神革命―孔子を中心として」『比較文明研究』第十八号（二〇一三）「6　孔子とソクラテスの比較」および「インドにおける精神革命―ゴータマ・ブッダを中心として」『比較文明研究』第二十号（二〇一五）「付論―ゴータマ・ブッダの仏教と孔子の儒教の比較」を参照。本篇でも最後に付論として「イエスとブッダの比較」を簡潔に誌しておくこととする。

（i）終末 vs 苦

イエスにとっては「終末」（ἔσχατον）の問題が出発点にあった。これに対しブッダにはもちろん終末の意識はなく、「苦」（dukkha）の実感が出発点であった。このように出発点がまず異なる。

（ii）信仰 vs 内観

イエスにあっては、終末において神のしらせ福音を信ずること、この信仰（πίστις）が求められた。これに対しブッダにおいては特定のものを信ずるのではなく、この世の在り方を知的

に内観（vipassanā）することが最も重要なこととなる。

（iii）救い vs 悟り

イエスにあっては、罪におとされた人々の信仰による救い、救済（σωτηρία）がまず問題であった。これに対しブッダも人々を苦から救い出すことを求めたが、それは悟り（bodhi）の後に来る解脱（mokṣa）によって得られるものであった。その結果として苦からの救いが得られる。

（iv）愛 vs 慈悲

イエスにおいて愛（ἀγάπη）は、人の神への愛であり、神から人への愛であり、またこのことによる人の人に対する愛となる。その背後にはつねに神がある。しかしブッダの慈悲（maitrī, karṇā）には神はなく、神ではなく空がその背後にある。「空」（śūnya）の認識が、慈悲の源泉となっている。この点が大きく異なる。（大乗仏教ではこれが〝仏〟の慈愛に変ってきている。）

（v）祈り vs 禅定

イエスにとって、父（Ábbā）に対する祈り（προσευχή）が、「人の子」である自分の神への通路となっている。crucial な時には、「人の子」と神との一致を願って、イエスはこの祈りを捧げる。これに対し、ブッダの場合、このような超越者に対する祈りというものはない。その代りに悟りにいたるための禅定（samādhi）が実践される。

（vi）超越 vs 内在

イエスにおける宗教的行為は、超越の神なしには存在しない。しかしブッダにおいては、宗教はあくまで超越者に関わるものではなく、自らの意識に内在的な自覚（jñāna-darśana）によっている。ここに「超越」（transcendency）と「内在」（immanence）の大きな対照がある。

（vii）外向的行動 vs 内向的冥想

イエスはつねに外に向って行動する。行動することにより、終末における救済の実践を行おうとする。もちろん内に深い神への信仰をもってではあるが。これに対し、ブッダはまずあくまでも内に向って内省し、存在のあり方を見つめ、これを分析して「空」の実相を把握する冥想に徹する。そしてブッダは他者にもこれをすすめて自分で悟りを得させようとする。ブッダの救いは、このような内向的冥想によって得られるのである。

＊

さて二〇〇八年より続いた四つの地域における「精神革命」（ソクラテス、孔子、ブッダ、イエス）の比較研究は、こうした細部の項目的比較にとどまらず、大局的総体的比較を必要とするが、それについては「「精神革命の時代」（Ⅰ）」（『比較文明研究』第十三号、二〇〇八）の序説の部分（1　精神革命とは何か）を参照されたい。それでも不充分なところがあり、とくにこの「精神革命」が、現代に生きる我々とどのように関わるかの問題は、まだ残されている。これについて筆者の方向はほぼ定められているが（本稿注(25)参照）、なお詳論が必要であろう。しかしそれはまた別稿にゆずるとして、ほぼ十年に亘る筆者の「精神革命の研究」は、これを以って一応の完結としたい。

（なお本稿「イエスの生涯と思想」の副題が「イスラエルにおける「精神革命」Ⅱ」となっているのは、『比較文明研究』第二十二号（二〇一七）掲載の「イスラエルにおける「精神革命」Ⅰ—古代イスラエルの社会と思想」の続稿であるからである。）